

其の類族とは別のものであつた事は明かであつて、かの風貌頗る異なる種族を指したものであると思はれる。然も此れ丈
けではまだその胡人の何物であつたかを知るに充分とは認められぬ。然るに同書同傳に、貞觀四年正月の事件とし
て、李靖が頡利可汗を征伐して定襄を襲ひ、頡利は走りて牙營を磧口に徙したと記し、それに續いて「胡酋康蘇密
等、遂以隋蕭后及楊政道來降」と記して居る（此の事は新唐書同傳にも見える）。隋の蕭后といふのは煬帝の皇后蕭氏、楊政道といふ
のは齊王暕の子で、共に竇建徳の許に在つたのを、頡利可汗の兄にして、その前代の可汗であつた處羅可汗が迎へ
取り、その牙營に置いて居つたものである。さて胡酋康蘇密といふのはトルコ族の名とは考へ得られず、其の姓か
らして康國、即ちサマルカンド地方の人で、ソグディアナ人であつたことは推知し得らるゝから、當時突厥に在つ
たソグディアナ人の酋首と思はれる。而して頡利が牙營に置いた此等の蕭后楊政道等を伴つて唐に歸したといふ以
上、この康蘇密といふのは、必ず頡利の牙營に出入し、之と親近の關係の有つたものであらうとの想像は、許され
得べき性質のものと思ふ。そうすれば前に見た「頡利每委任諸胡」と記された胡といふものは、矢張り他の場合に
も認め得ると同じくソグディアナ人を指したもので、後に蒙古時代にも見らるゝと同様に、當時突厥に居つた西方
ソグディアナの人、政を委ねてゐたものであると見るのが適當の解釋と考へる。

兩唐書の玄宗本紀に、開元九年四月に蘭池州の胡康待賓が叛したこと、七月に王峻が之を擊破つて殺したこと、
八月に其の殘黨康願子が復た叛いたこと、翌十年九月に張說が之を擒へたことなどが記されてある。舊唐書張說傳
には其の次第を記して、